

平成22年度 文部科学省「大学生の就業力育成支援事業（就業力GP）」採択事業

事実にもとづく 日本語ライティング能力

本学の紹介

大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部をご紹介します。

大正4(1915)年、大阪音楽大学は永井幸次により創立されました。

以来、関西で唯一の音楽単科大学として、高い音楽性と演奏技術を身につけた、たくさんの「音楽人」を社会に輩出しています。

クラシック音楽の領域にとどまらず、ジャズ、ポピュラー、邦楽、ミュージカルなど、学生の意欲に合わせて学ぶことができる音楽大学であり、演奏技術はもちろんのこと、音楽から学んだことを糧にして、社会でちから強く生きる「音楽人」の育成を目指しています。

学内には、本格的なオペラ公演が可能で、カレッジ・オペラハウスや、在学生ならば原則的に無料で使用できるミレニアムホールを擁しており、本物の音楽に触れられる、あるいは自分の学習成果を発表できる充実した設備を整えています。

また、定期的開催されるオペラ公演や社会人向けの音楽講座、小・中学校での本学学生による演奏指導など、多数の地域貢献活動を通じて、音楽によって地域とつながる取組にも力を入れています。

世界音楽 並ニ
音楽ニ関連セル諸般ノ芸術ハ
之ノ学校ニヨツテ統一サレ
新音楽 新歌劇ノ
発生地タランコトラ
祈願スルモノナリ

「建学の精神」

学生数 ※平成24年1月1日現在

大阪音楽大学 852名
大阪音楽大学短期大学部 308名
大阪音楽大学音楽専攻科 32名
大阪音楽大学短期大学部専攻科 18名
大阪音楽大学大学院 28名
計1238名

大阪音楽大学 音楽学部

作曲専攻
音楽学専攻
声楽専攻
ピアノ専攻
パイプオルガン専攻
管楽器専攻
弦楽器専攻
打楽器専攻
クラシックギター専攻★
邦楽専攻
ジャズ専攻★
電子オルガン専攻★
演奏家特別コース(ピアノ/ヴァイオリン)

大阪音楽大学短期大学部 音楽科

作曲コース
声楽コース
ピアノ・コース
管楽器コース
弦楽器コース
打楽器コース
邦楽コース
クラシックギター・コース★
ジャズ・コース
ポピュラー・コース
電子オルガン・コース
ミュージカル・コース
ダンスパフォーマンス・コース★

大阪音楽大学音楽 専攻科

作曲専攻
声楽専攻
器楽専攻

大阪音楽大学大学院 音楽研究科

作曲専攻
声楽専攻
器楽専攻

大阪音楽大学短期大学部 専攻科

音楽専攻

★平成24年4月に新設



ご挨拶

大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部
理事長 中村孝義

音楽行為とは、音楽を通じて聴き手に何らかのメッセージを伝えようとする行為である。音というものは、その抽象性ゆえに、一般的には具体的なメッセージなど伝え得ないと勘違いされることがままある。しかし実はそうではない。送り出し側が明確なメッセージを持って演奏したとき、不思議なことに聴き手は、ただ単に音や響きが美しいなどという感覚的な次元を越えて、心をつき動かされるような何か(それがメッセージだ)を与えられるのである。

音楽をするものは、ただ音を磨き、美しい音楽を奏でさえすればよいなどといっている時代は、我が国でも遠の昔に過ぎ去った。音楽人は、時に応じて自ら伝えようとすることを明確に言葉で説明することが求められるし、また自分のした音楽行為を言葉で反芻することも必要となる。

今や日本語で書き、語る能力は、音楽人にとって不可欠のものである。そしてそうした能力をより豊かに身につけることによって、音楽人は社会での存在感をよりいっそう高めることが可能となる。文科科学省の「大学生の就業力育成支援事業」に採択された「日本語ライティング支援」活動が、本学の創立100周年に向けて内外に発した「ちから強く生きる」音楽人「をここから」という宣言を、より豊かに実現する活動となることを願っている。

「事実にもとづく日本語ライティング能力」取組担当者
教養教育部会 教授 山下豊

一度は、原点に立ち戻って考えてみる必要があるのではないだろうか。

かつてどうであったかはともかく、これからの社会にとって音楽はどんな価値や意義を持つべきなのか。音楽の大学で、音楽を学ぶことの価値や意義はどこにあるのか。演奏技術を高める、音楽知を深める、もちろんそれが大切なのは分かったこと。誰しもうまくなりたいたい、この情熱、もっと言えば欲望がなければ、音楽の大学には来なかった学生たちです。しかし、うまくいったあとの彼らに何が残されているのか。社会にとって、彼らにはどんな価値や意義が期待されているのか。

こうした問いに正解はありません。でも、あえて、一つの答えを私たちは作り出し、この事業を始めました。これからの社会に必要なものは、音楽的な感性をもって社会を見つめ直し、社会を再創造していく若い力だ。それは演奏することだけでなく、音楽的な感性をもとにしてこれからの社会にとってより良い未来像を提案していく力です。

今の音大生にもそれだけの力はあると思います。でも、提案するには、音楽的な感性を言葉に変えて、自分の考えをコンセプトとして、表現できなければ、社会には伝わらない。だからこそ、これからの音大生には、音楽の力に加えて、想いを実現していくための言葉の力が必要になります。社会もまた、こうした人材を中心に持たなければ、これからより豊かな社会へは変わっていきけないと思います。社会にとってやさしい変革を創り出せる、そういう力の可能性を私たちは試みようとしています。

活動報告

日本語ライティング支援室の活動内容をご紹介します。



常時個別相談を受け付けています。

日本語ライティング支援室は、月曜日から金曜日まで毎日、学生に向かって開放されています。音大生にとって、日本語ライティング能力が必要とされる場面は多岐に渡ります。授業で課されたレポートの作成はもちろんのこと、演奏会で配布するプログラムノート(楽曲解説)、チラシに掲載するプロフィール、宣伝文、チラシそのものの作り方、伴奏の依頼や演奏会の招待状などの手紙、演奏会のための企画書、また就職活動を行っている学生は、エントリーシートや課題作文を書く必要にも迫られています。日本語ライティング支援室では、各スタッフがそ

日本語ライティング支援室にはこんなスタッフが揃っています。

平成22年12月、教養教育部会に日本語ライティング支援室が設置されました。当初のスタッフは4名で、文章指導の経験を有する専任教員の他、デザイナー、元テレビ局のディレクター、現代日本語を研究する大学院生と、バラエティに富んだ経歴を持ちます。音大生にとって未知の社会経験を持つ個性的なスタッフを集めたことには、単に「正しい日本語」を教えるのではなく、社会で生きるために必要な「伝える力」の重要性を感じてほしいという大学の願いがこめられています。

スタッフはその後増員され、平成24年1月現在では専任教員3名、助手1名、職員2名の合計6名で運営を行っています。H号館304号室のスタッフルームはいつも賑やかで、親しみやすい雰囲気を作り出しています。

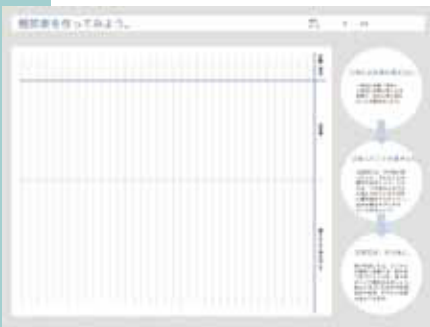
日本語ライティング支援室は、月曜日から金曜日まで毎日、学生に向かって開放されています。音大生にとって、日本語ライティング能力が必要とされる場面は多岐に渡ります。授業で課されたレポートの作成はもちろんのこと、演奏会で配布するプログラムノート(楽曲解説)、チラシに掲載するプロフィール、宣伝文、チラシそのものの作り方、伴奏の依頼や演奏会の招待状などの手紙、演奏会のための企画書、また就職活動を行っている学生は、エントリーシートや課題作文を書く必要にも迫られています。日本語ライティング支援室では、各スタッフがそ

それぞれの得意分野を活かして、それらの相談を全て受け付けています。

相談は1人当たり平均1時間で、大学・短大の1年生から大学院生まで幅広く来室しています。相談件数は、平成23年4月〜平成24年1月で61件。教員からすすめられて来室するケースもありますが、大半が自主的な来室です。きっかけは学生同士の口コミがもっとも多く、友人と誘い合わせて来る学生や、相談内容を変えて繰り返し来室する学生もおり、学生の間には「きちんとしたライティング能力を身につけよう」という意識の向上が見られます。教職員からの相談も7件あり、要請を受けて授業に参加し、書き方説明を行ったり、大学院生の文章指導などに連携して当たることもしばしばです。

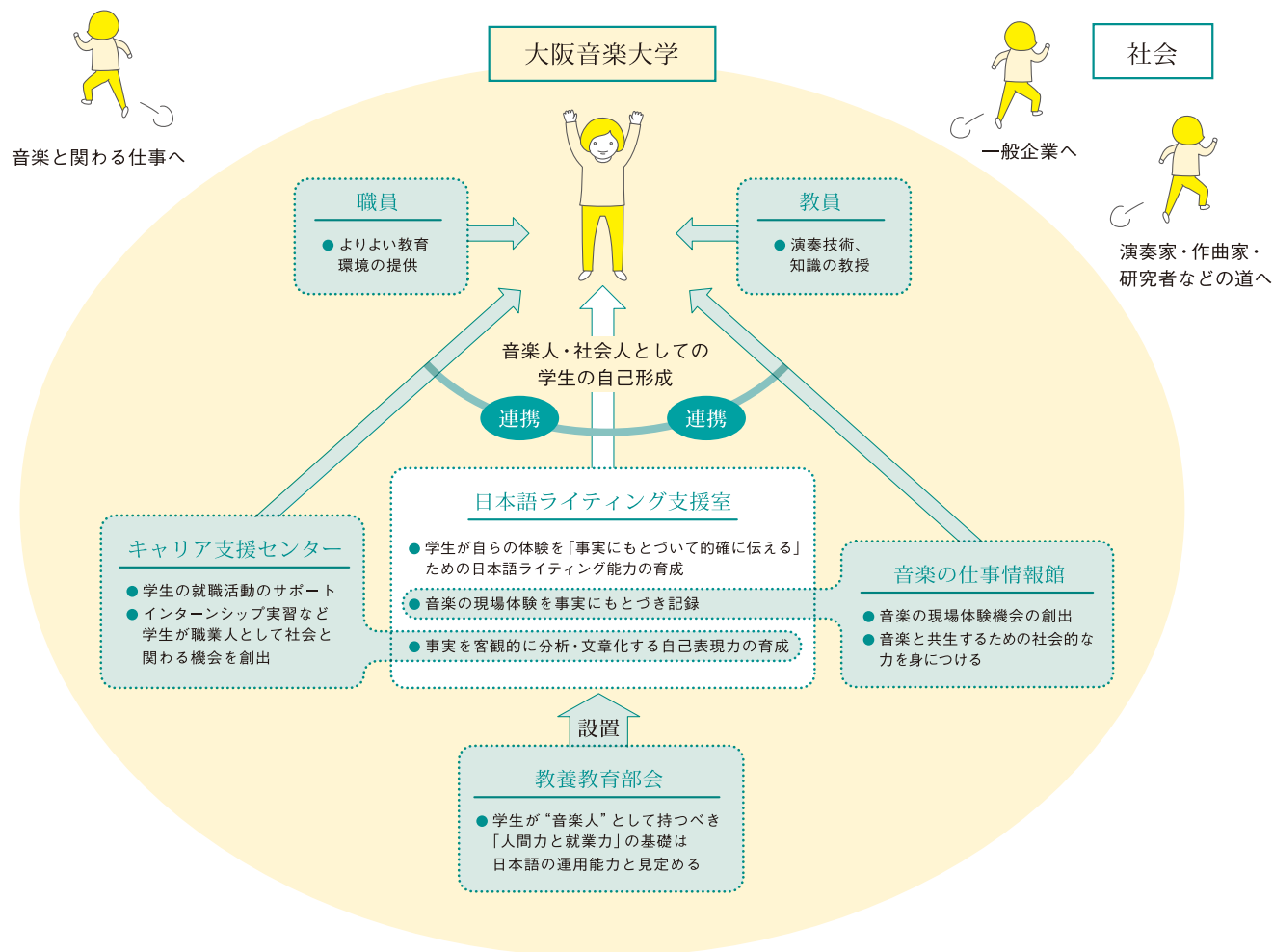
相談のタイプとしては、自分で書いたものを持参して個別添削を希望する学生と、「何を書けばいいのかかわからない」と書く前の相談をする学生に分かれますが、スタッフは常に「何のためにその文章を書くのか(チラシを作るのか)」「読み手にもっとも伝えたいことは何か」を学生に問いかけ、自覚させるように心がけています。また、主語述語のねじれた文などを自分で推敲できない学生の場合は、声に出して読み返すことをすすめたり、「書くことが思いつかない」という学生の場合には、発想を促すワークシートを使用したりと、相談ごとにきめ細かな対応を行っています。

↓当室で作成した「発想を促すワークシート」の1例



事業趣旨

平成22年度「大学生の就業力育成支援事業」として、本学の「事実にもとづく日本語ライティング能力」が採択されました。



本学は、関西で唯一の音楽単科大学として、これまで充実した実技教育のカリキュラムと、豊富な音楽活動の現場体験の機会を創り出してきました。平成21年度には、文部科学省より、「大学教育・学生支援推進事業【テーマB】学生支援推進プログラム」として、本学の「音楽の仕事情報館」構築による学生の音楽仕事力育成と就職支援」が採択されています。これは、学生に音楽の現場体験の場をより幅広く提供するものであり、学生が深く音楽の仕事を理解し、学修することで、生涯を通じて音楽と共に生きていくための力を身につけることを目指す事業です。

しかしその一方で、社会人としての基礎力の育成については、本学においていまだ十分な教育体制が整えられておらず、これは、学生に音楽の現場体験の場をより幅広く提供するものであり、学生が深く音楽の仕事を理解し、学修することで、生涯を通じて音楽と共に生きていくための力を身につけることを目指す事業です。

文部科学省より、平成22年度「大学生の就業力育成支援事業」として採択されたこの「事実にもとづく日本語ライティング能力」は、そのための組織として、教養教育部会に「日本語ライティング支援室」を設置しました。「日本語ライティング支援室」は、「音楽の仕事情報館」と協働しつつ、学生が体験するさまざまな音楽活動の現場において、そこで「事実」を客観的に文章化し、他人に「事実」が的確に伝わるまで書き直す作業を学修プログラムとしてモデル化することで、学生の自己表現力や自己分析力などの育成を目指しています。また本学キャリア支援センターとの協働および各教員等全学的な連携体制のもとで、学生の日本語運用能力の向上を支援し、未来に羽ばたく音楽人として、彼らにより積極的に社会に参画することを促していきます。

「書き方」の教科書を
発行しました。

本学のライティング支援の特徴は、音楽人にとって必要なライティング能力を「事実にもとづいて書く力」として根本的に見定め、レポートや論文に限らず、音大生の現状に合わせた形で広く捉えつつ、その育成を支援していることです。そのため、平成22年度は日本語ライティング支援室スタッフが学生・教職員にアンケートやヒヤリングを行い、具体的にどのような場面でライティング能力が必要とされているのかを調査しました。そして平成23年3月、ライティングの場面を入学から卒業までの時系列の中で分類し、レポート、音楽活動、インターンシップ、就職活動の4章で構成した、実践的な「書き方」の教科書『writing note』（A4変型判、48頁）を発行しました。



↑教材『writing note』

調査で見られた意見として、学生からは、「『書き方』を一度も学んだことがない」「正しい書き方を知らないが、それでかまわないと思っている」というものが目立ちました。一方で教職員からは、「読みづらいレポートを書く学生が多いが、本人がそれに気づいていない」「学生に『書き方』を学んでほしいが、授業の中心は音楽なので、簡単に学べるわかりやすい教材が良い」という声がありました。そこで『writing note』は、学生に対して、①ライティングの必要性を啓蒙すること、②ライティングのコツを実践的に伝えることの2点を目的とし、①のために、学生が手に取りやすいようなデザインや語り口調を積極的に取り入れました。また、②のためには、実際の文書の良い例・悪い例の両方を図で掲載することにより、視覚的に「きちんとした文書」を印象づけるようにしました。

『writing note』は、教員との連携のもと、授業を通じて使い方の解説を加えつつ全学生に配布し、入学から卒業まで使える教科書として、常に携帯するように指導して



『writing note』の主な内容

- | | |
|------------------|--|
| レポートの章 | <ul style="list-style-type: none"> ・レポートについて ・レポートの文体とは ・問いを立てる ・引用する ・リライトのすすめ |
| 音楽活動の章 | <ul style="list-style-type: none"> ・企画書を書く ・連絡メールを出す ・チラシを作る ・プロフィールを書く ・音楽活動を書く |
| インターンシップ
実習の章 | <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ実習日誌を書く ・実習記録を書く ・体験を文章にする ・まとめ作文を書く ・実習先にお礼状を送る |
| 就職活動の章 | <ul style="list-style-type: none"> ・「自分の棚卸し」をする ・自己PRで「私」を伝える ・志望動機で「熱意」を伝える ・履歴書を書く ・履歴書を送る、その前に |

います。また、インターンシップ実習と就職活動の2章が関連するキャリア支援センターでは、本冊子を学生を指導する際の指針として常時使用しています。それら実際の使用をふまえて、平成24年3月には、書き込みもできる増補改訂版を発行する予定です。



↑実習記録の良い例・悪い例

学生のための広報誌です。

日本語ライティング支援室では、学内向け広報誌として、およそ1月半ごとにフリーマガジンを発行しています。企画・記事作成・デザインを全て当室スタッフがを行い、学生や教職員に「書くこと」「読むこと」「発信すること」への興味を持ってもらおうと始めました。平成23年1月から3月までは『ライティング生活』(変型サイズペーパー)として1〜3号を、平成23年4月から平成24年1月は『WRITING NOTE』(B6判、12〜20頁)として1〜6号を発行しています。主な記事内容は左の通りです。



↑フリーマガジン『WRITING NOTE』

『ライティング生活。』主な記事

- | | |
|----------------|---|
| 創刊号
平成23年1月 | <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフ紹介 ・トピックス「音大生がよく間違える漢字ベスト5」 ・ライティング講座「事実を書く〜演奏記録をつけてみよう」 |
| 第2号
平成23年2月 | <ul style="list-style-type: none"> ・トピックス「クリティカルマス」 ・ライティング講座「自分の文章を読み返す」 |
| 第3号
平成23年3月 | <ul style="list-style-type: none"> ・トピックス「Twitterのススメ」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・ライティング講座「敬語のいろは」 |

『WRITING NOTE』主な記事

- | | |
|-----------------|---|
| 創刊号
平成23年4月 | <ul style="list-style-type: none"> ・特集「大音のナイス・スポット」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・学長あいうえお作文 ・ライティング講座「『とか』を使わない文章」 ・演奏会情報 |
| 第2号
平成23年5月 | <ul style="list-style-type: none"> ・特集「練習で行き詰まったときの対処法」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・ライティング講座「手紙の書き方」等 ・演奏会情報 |
| 第3号
平成23年7月 | <ul style="list-style-type: none"> ・特集「チラシを語る座談会」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・ライティング講座「『なので』に注意！」 ・演奏会情報 |
| 第4号
平成23年9月 | <ul style="list-style-type: none"> ・特集「先生方の選んだ秋〜前編」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・ライティング講座「レポートのタイトルの付け方」 ・演奏会情報 |
| 第5号
平成23年11月 | <ul style="list-style-type: none"> ・特集「先生方の選んだ秋〜後編」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・ライティング講座「クラシックのチラシの作り方」 ・演奏会情報 |
| 第6号
平成24年1月 | <ul style="list-style-type: none"> ・特集「去年を表す漢字1字」 ・インタビュー「大音のめがねさん」 ・ライティング講座「レポートの見直しチェックリスト」 |



↑フリーマガジン『WRITING NOTE』1〜6号の表紙

これらの広報誌は、「書き方」の補助教材としての役割を持つと同時に、学内のコミュニケーションツールともなっています。毎号のデザインで遊びをこらし、本学の公式広報誌『Muse』と内容が重ならないように一つ一つの記事を企画することで、「これまで学内になかった雑誌」としてまず教職員から好評を得ることができました。また、インタビューや特集記事を作成する過程で、さまざまな専攻・コースの学生が当室に来室するようになりました。日本語ライティング支援室のあるH号館は、主に教員の研究室が並ぶ建物であり、授業の合間に学生が来室するには少し離れた場所に位置しているのですが、広報誌が学生とのコミュニケーションのきっかけになっています。

ライティング講座を開きました。

ミニ講座ですぐに使える表現力を

日本語ライティング支援室では、キャリア支援センターと連携し、名刺講座や敬語講座など、昼休みや授業後の時間を利用して気軽に参加できる30分以内のミニ講座を開催しています。平成23年4月～平成24年1月で計8回を実施しました。名刺講座では、参加した学生が自分の活動に合わせてオリジナルの名刺を作成します。音楽活動のための名刺、就職活動のための名刺、場合にに応じて、どのような情報を名刺に掲載すべきか。学生自身が考え、情報を選択していきます。講義を聞くのではなく、学生が発信し、自ら考えるきっかけとするための講座です。

敬語講座では、当室作成のワークシートを用い、コンサートホールでの電話応対など、場面を設定して実践的に敬語の基本を学びます。講座後の学生アンケートでは、手紙の書き方講座なども実施してほしいという要望があり、今後とも要望をふまえながら実施する予定です。

講座は、学内の1か所のみで実施すると、専攻・コースによって参加しやすい学生と参加しづらい学生に分かれてしまうので、学内のいろいろな場所で実施しています。また、開催1週間前にはポスターを掲示するほか、食堂や学生サロンに卓上広告を設置したり、本学のポータルサイトや当室のブログで案内したりするなど、告知を積極的に進めています。



↑ミニ講座のポスター



↑教育実習の事前講座



↑名刺講座



↑ミニ講座の卓上広告

イベントを開催しました。

第1回大音ポップコンテスト

ポップとは、商品の販売促進を目的として書店やコンビニエンスストアなどで使用される、ハガキ大の広告です。これを利用して、平成23年9月～10月には、日本語ライティング支援室主催による「第1回大音ポップコンテスト」を開催しました。音楽で思いを伝えることに長けた本学の学生に、言葉や視覚デザインで伝えることの楽しさを体験してもらいたいという趣旨でした。また、限られたサイズの紙で読み手に対し効果的にPRすることは、自己発信力を養うきっかけにもなります。できるだけ多くの学生に参加してもらいたいと考え、全学的に協力を求めて応募要項や応募用紙を配布し、応募箱を設置しました。その結果、189点の応募がありました。

応募作品には、文章だけでなく色や構図、イラストや文字デザインなど、見せ方を工夫した作品が数多く見られました。「文章を書くのは苦手だが、絵を描くのは好きなので楽しかった」という声も多く、このコンテストを通じてポップという広告媒体に興味を持ち、手の込んだ作品を応募した学生が多数おり、新たな学生の参加を促すきっかけとなりました。結果は学内で掲示したほか、当室スタッフによる講評を加えたまとめ冊子(A6判、8頁)を作成して配布しました。



↑ポップコンテストのポスター



応募総数：189点(学生177点、教職員12点)
募集期間：平成23年9月26日～10月18日
各賞：金賞1名 銀賞1名 銅賞1名 佳作5名
ライティング賞3名 計11名

インターンシップ実習の事前講座で準備万端

キャリア支援センターや教職部会と連携し、インターンシップ実習や教育実習に参加する学生のための事前講座を実施しています。平成23年1月～平成24年1月で計4回を実施し、教育実習の事前講座では約200名の参加がありました。内容は、インターンシップ実習申し込みの際に必要なエントリーシートの書き方や、実習中の日誌の書き方および実習後のまとめ作文の書き方です。エントリーシートでは、説得力のある志望動機や自己PRを書くことが必要であるため、当室作成のワークシートを用いつつ、過去の自分をしっかりと振り返り、根拠となる事実をきちんと説明するように促しています。また、実習日誌やまとめ作文では、出来事をただ連ねて書いて字数を埋めるのではなく、出来事をもとにした考察が重要であることや、ナンバリングなどを用いて整理して文章をまとめることを指導しています。

「音楽」について考える講演会

音楽を仕事にしている卒業生や、音楽と隣接する業界で活躍している方を招いて、講演会を2回開催しました。本学学生にとって音楽は当たり前のものとして日常にあります。2つの講演会は、仕事として音楽を他者に伝えるとはどういうことか、音楽とは何か、学生が音楽をしっかりと客観視する機会の一つになりました。講演後はその場で質疑応答を行ったほか、学生に感想や質問をミニレポート(A4判ワークシート)の形で提出させ、それを講師に読んでもらい、場合によってはレスポンスを返してもらうことで、講師と学生のコミュニケーションを図りました。今後も定期的な開催を予定しています。

第1回：平成23年11月16日

講師：渡邊崇さん(卒業生・作曲家)

商業的なCM音楽から、アーティストックなショートフィルム用音楽まで、実際に手がけた作品を流しつつ講演を行っていただきました。学生65名が参加。講演後のミニレポートでは、「ショートフィルムはCMに比べてわかりやすかった。芸術の『読み方』をもっと勉強したいと思った」「クライアントによって曲の作り方を変えているのが面白かった」などの感想がありました。

第2回：平成23年12月21日

講師：山崎都世子さん(映画監督)

映画監督として、作曲家や演奏家に音楽を依頼する立場からの経験などを語っていただきました。学生94名が参加。講演後のミニレポートでは、「映像の作り方と音楽の作り方には共通点があるところがあった」「芸術は説明を聞いて初めてわかるところがある。でも作品だけですべてを語らなければならないこともあるのでは。そのバランスが難しいと思った」といった感想がありました。



学生に聞きました

声楽専攻 2年生 鹿岡晃紀さん



Q: 演奏会記録を書いて良かったことはありますか?

A: 「書く」という動作をできたこと、記録によって活動を自分の記憶にとどめられたことが良かったです。普段、「書く」ことが本当に少ないので。数日間続く音楽イベントで毎日記録を書きましたが、「集中して書いた」という体験は強烈なものでした。毎日、前日とは違うことを書くと思い、自然とアンテナを立てるようになって、いろいろなことを見たり、行動に移したりしていました。記録につけることで、その日の演奏や行動の記憶が呼び起されますし、演奏会記録は自分を成長させてくれたと思います。

管楽器専攻 1年生 奥田愛美さん



Q: 演奏会記録はどんなふうに使っていますか?

A: 私は5人のグループで演奏しているので、メンバーで見せ合いながら書いています。最初は書かされている感じだったのですが、一度、舞台上で大失敗したことがあって、自分達には反省が必要だと思った時に、演奏会記録を使えばいいんだと気づきました。失敗時の記録をメンバーで見せ合うと、皆いろんなことを考えていて、参考になります。演奏会記録は、正確にきちんと書くように注意されているので、普段の自分とは少し違う文章になりますね。お客様の人数や反応を書く欄もあり、書くことで、常に自分達が「人から見られている」という意識を持てます。

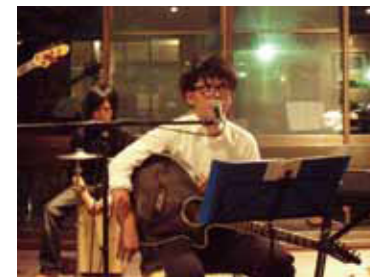


↑「有馬温泉ゆけむり大学2011」演奏会記録用紙

→有馬温泉ゆけむり大学2011



1, 2, 3: スノーマンフェスティバル
4: 有馬温泉ゆけむり大学2011
5: 記録作成の様子



社会に発信できる記録作りに取り組んでいます。

現場での体験を文章に

「事実にもとづいて書く」ことの基盤になるプログラムとして、日本語ライティング支援室は、学生が音楽活動の体験を記録する「演奏会記録」の作成を支援しています。本学では、学生が学内外で数多くの音楽活動を行っています。コンサートホールで行う演奏会だけでなく、地域や企業と連携したストリートライブ、介護施設での慰問演奏会、小・中学校でのレクチャーコンサートや吹奏楽指導など、多岐に渡るものです。それら音楽活動の現場で得られる体験は、非常に貴重なものといえます。なぜその曲を選曲したのか、現場をどのように組み立てたか、実際に演奏してどのように感じたのか。自らの体験を振り返り、記録として残すことで、自分を客観的にとらえる力、自分の演奏体験を他者に対して説明する力が身につきます。これらの記録を積み重ねた、自分の音楽活動のポートフォリオは、やがて自分の音楽を、体験を、社会に発信する力ともなっていくのです。この取組を通じて、当室は学生に音楽人・社会人として必要となる「現場体験と事実にもとづいたライティング能力」を養うことを目指しています。

などを正確に書くように促し、個人的なメモではない、きちんとした記録を意識させるようにしています。また、「選曲理由」の欄を設け、自分の行動を論理的に振り返ることができるようにしました。最後に講評欄を設け、引率のスタッフや教員から、あるいは演奏会を主催した企業の担当者などから講評を記入してもらうようにし、学生のモチベーションを高めています。

実施に際しては、まず本学の「音楽の仕事情報館」と連携し、兵庫県の有馬温泉で開催された「有馬温泉ゆけむり大学2011(平成23年8月〜9月、参加学生48名)」から記録作成を始めました。音楽活動そのものへの意欲の高さから、大半の学生が記録をぎつしりと書き込んでいました。講評は「音楽の仕事情報館」スタッフが、イベントの後日には学生が再集合して、演奏と記録作成を振り返る会が催されました。ここでは、「記録によって客観的に自分の演奏を振り返ることができ、次への課題が明確になった」「演奏後に一緒に記録を書く作業がバンドのメンバー間の交流につながった」といった肯定的な感想が多く見られました。記録をweb上でも記入・閲覧できるようにしたこと、尊敬している先輩の記録を読むことができ、何でもできると思っていた先輩が、実は演奏後にしっかりと振り返りや反省をしていることがわかった」という感想も出ました。

その後、「音楽の仕事情報館」では毎月10件近い音楽イベントを学生に提供しており、その中で記録作成が継続的に行われ、たとえば大阪駅・梅田駅でのクリスマスイベント「スノーマンフェスティバル(平成23年11月〜12月、参加学生57名)」でも参加者全員が記録を作りました。学生の中には、自主的に用紙を作成して記録をつける者も見られます。また、平成23年度後期には、教員と連携し、演奏会の企画・実演を行う授業においても、この記録作成を導入しています。まずは事実にもとづいて書くこと、現場の体験を振り返りながら文章化することで、自分を見つめ直すこと。さらにその編集・リライトを通じて、他者が共有できる「社会的記録」として蓄積していくこと。社会的記録としての成長・蓄積は平成24年度からの目標になりますが、学生の声を聞きつつ、記録作りに取り組んでいきたいと考えています。

次年度の課題

「演奏会記録」をさらに全学的に導入し、それと同時に、一つ一つの記録の質を高めることを次年度の課題としています。記録用紙の書式やwebへの公開方法などは、個々の学生のニーズに合わせて、数種類を用意したいと考えています。

また、平成24年度には、日本語ライティング支援室が関わって新規開講する授業「音楽活動ポートフォリオ作成」(短大)にて、学生の自己表現力やプレゼンテーション能力の向上を目指す予定です。同じく新規開講の「日本語ライティング」(大学)および「日本語ライティング演習」(短大)では学生の日本語運用能力の向上を、また「クリティカル・シンキング」(大学)および「クリティカル・シンキング演習」(短大)では、客観的な事実をもとに考え抜く思考力を養うことを目指しています。

